



## 〇〇表紙について〇〇



チャには小葉種の中国種 (var. *sinensis*) と1823年にインドのアッサム地方で発見されたアッサム種 (var. *assamica*) の二変種があります。中国種は雲南省西南部の温かい地域の原産ですが、順応性が高く、冬の寒さに適応するために葉が小さくなったものが生き残り、冬に凍結する地域でも栽培できます。また、渋味成分であるカテキン含有量が少なく、酵素の活性も弱く酸化発酵しにくいことから、一般に緑茶向きとされています。中国、日本などの緑茶生産国で栽培されているほか、イラン、グルジア、トルコなど冬の寒さが厳しいところでは中国種を栽培しています。

中国種は常緑の低木で、丘陵地を利用して栽培されています。野生化したものは高さが7-8mにも達しますが、栽培しているチャの場合は下から多く分枝させ、小枝を密生させて1m前後の高さに揃えられています。春、新葉が始めた4月中旬ごろから5月上旬ごろに一番茶を摘みます。新芽の一番上の心葉とその下に続く二枚の葉をあわせて摘みます。葉は広皮針形~長楕円形で先が尖り、葉縁には鋸歯があり、葉質は厚く、表面は濃緑色で光沢があります。花は晩秋から冬にかけて、芳香のある径2-2.5cmほどの白い花をつけます。果実は蒴果で、裂開して球形で光沢のある種子を放出します。

一方アッサム種は耐寒性がないため、栽培は無霜地域に限られますが、渋味成分となるカテキン含有量が高く、酵素の活性が強く発酵しやすいことから、紅茶向きとされています。中国種と比べると茶葉が大きく、葉面には深くシワが走っているのが特徴です。また、中国種と違い喬木型なので、最大で10mほどまで直立することもあります。生育が良く葉も大きく収量が多く、アッサム地域はもちろんスリランカの低地、インドネシア、ケニアなど紅茶の新興産地で無霜地域には、殆どこのアッサム種の選抜品種が導入されています。

中国最古の辞典『爾雅』(BC200頃)に「周公旦(BC1037没)が、櫝は苦茶なり。一名茗。早く採る者を茶と云い、晩く採る者を茗と云うなり。蜀の西南の人、苦茶と名づく」(郭璞の『爾雅・註』より)と言っていることから推測すると、蜀の南西、今の雲南では「苦茶」と呼ばれ、今から3000年前には黄河の支流渭水流域にまで伝わっていたことが伺えます。

しかし、本格的に普及するのは唐の時代になってからで、陸羽(733-804)が『茶経』(760頃)を著したことで、飲茶の習慣は多くの人々の間に広がりました。「茶は南方の嘉木である」から始まり、茶の起源、製茶器具、製茶法、茶器、茶の煮たて法、茶の飲み方、茶の史料集、茶の産地、略式の茶などについて当時の茶の知識を詳しく解説しています。

日本でお茶が飲まれた記録は『日本後記』(840)の弘仁六年(815)四月廿二日に「嵯峨天皇が近江国韓崎へ行幸。梵釈寺を過ぎたところで、大僧都・永忠(743-816)が手ずから茶を煎じて奉った」とあるものが始めてです。同年六月には「畿内并に近江、丹波、播磨等の国に茶を植え、毎年献上させた」ともあり、その頃には栽培が行われていたと考えられます。

鎌倉時代に入ると臨済宗の禅僧江西(1141-1215)は1168年と1187年の二度南宋に渡り禅宗を納めると共に、『茶経』とも出会い、禅僧の間で飲まれていたお茶について学び帰国しました。帰国後『喫茶養生記』(1214)を著します。冒頭は「茶は養生の仙薬なり」で始まり、薬としての効能や製茶法について述べ、次に茶の歴史、形態、効能、採取時期、摘み方、製茶法など当時の喫茶の方を詳しく説き、国内での飲茶の基礎を築きました。以上のように禅と共に伝えられた喫茶の方は1400年代に「侘び茶」という日本独自の茶に発展し、千利休(1522-1591)へと受け継がれていきます。

(村上守一 記)